

平成
29年度

八雲八雲をよむ

感想文・詩
入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、現在の「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とする様々な事業を行っています。

この一環として、昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十二回目となりました。今回は、感想文四十三編、詩十七編、合計六十編の力作をお寄せいただきました。

この作品集では、応募作品のうち優秀賞及び優良賞を受賞した十編の作品を掲載しています。ぜひ多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと思います。

最後になりますが、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

平成三十年三月

主 催 松 江 市

松江市教育委員会
八 雲 会

後 援
毎日新聞松江支局
B S S 山陰放送

目次

第32回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉

八雲の怪談のみ力とこわさ

松江市立大庭小学校 三年 山田 優 桔…………… 1

〈優良賞〉

耳なし芳一を読んで

松江市立宍道小学校 六年 有 藤 あかり…………… 2

★中学生の部

〈優秀賞〉

「草ひばり」を読んで

熊本大学教育学部附属中学校 一年 佐 藤 恵梨奈…………… 3

〈優良賞〉

「幽霊滝の伝説」を読んで

学習院女子中等科（東京都）二年 吉 田 真里亜…………… 4

★高校生の部

〈優秀賞〉

ものの捉え方

学習院女子高等科（東京都）二年 杉 田 由 愛…………… 6

〈優良賞〉

「葬られたる秘密」～お園に共感～

山口県立山口高等学校通信制 二年 三笠 晴香…………… 7

★一般の部

〈優秀賞〉

小泉八雲にとつての「松江」

埼玉県川越市 成 本 孝 宏…………… 9

〈優良賞〉

「雪女」考 その二 —— 美しい顔 ——

埼玉県越谷市 森 とし子…………… 10

第29回 詩 入賞者

〈優秀賞〉

雪女

岐阜県加茂郡八百津町 新 井 悠…………… 13

〈優良賞〉

のっぺらぼう

千葉県市川市 森 下 万 尋…………… 14

講 評…………… 15

感

想

文

小学生の部

〈優秀賞〉

八雲の怪談のみ力とこわさ

松江市立大庭小学校三年 山 田 優 桔

学校のおすすめ本で手にとったことがきっかけで、八雲の有名な作品を読みました。怪談というと、お化けが出てきて人をおどかす怖いイメージがありました。しかし、八雲の怪談は私の想像と全く違っていました。数ある怪談の中でも「黒い手」という話が心にのこりました。

「黒い手」という題名にひかれ読んでみると、その正体は奥方の手でした。余命わずかな奥方が側室である雪子へのしつとから、彼女の体へおぶさったまま息絶えます。死後奥方は黒い手となり、雪子の体をはいまわり生涯苦しめるという話です。

私は、奥方が死ぬ直前にしたお願いが気になりました。一つ目は、雪子が殿様の正室になる事、二つ目は庭にある満開の桜の花を見るために自分をおぶる事でした。全く関係のない二つのお願いだと思っていましたが、実は深いつながりがありました。奥方が仕掛けた雪子へのワナだったのです。目的は、雪子におぶさって絶命してそのままの体勢ではなれないことでした。私は少し分かったよ

うな気がしました。奥方は自分より美しい人が正室になるのがいやだったから、一つ目のお願いは雪子や殿様を安心させ、自分を信じてもらうために皆に「私は雪子を妹のようにかわいがっています。」と何度も言ったのだと思いました。

奥方は雪子へのしつとで病に倒れてから殿様がけん命に看病してきたことへの恩がうすれています。私なら、子どもたちと話をしたり死んだ後のことを頼んでおいて心残りのないように過ごします。読み終えた後は、しつとのこわさと、大事な事が見えなくなってしまう奥方への悲しさで心がいっぱいになりました。

八雲の怪談は、色々な結末があります。自分の心の弱さに負けず約束を守った事で後に成功し、幸せな暮らしを手に入れる話があります。また、自分の心の弱さに負け約束をやぶってしまい大事な人を失う話もあります。「黒い手」は、しつとで物事を悪い方へ思い込んでしまい、罪のない人の人生をくるわせてしまいます。

怪談のみ力はだれでも奥方や雪子の立場になりうる事です。人のおろかさや弱さ、時には恐怖やゆうわくに負けない心の強さをテーマにしているところだと思います。怪談の中では、人は試されています。それを良くするのも悪くするのも人によって変わります。そこに怪談の怖さがあるような気がします。

左目が不自由だった八雲ですが、だれよりも人の心や表情がはっきりとうつついていたのではないのでしょうか。

〈優良賞〉

耳なし芳一を読んで

松江市立宍道小学校六年 有 藤 あかり

私は、小学三年生の時に、おすすめの本として、小泉八雲の本を読みました。そのころは、とくに何も考えずに読んでいたのですが、小学六年生になった今、あらためて、じっくり読んでみました。

小泉八雲の代表作の一つの「耳なし芳一」を読んだ時は、目の見えない芳一の聞いた、「芳一。」と言う侍の太く、低い怖そうな声や、和尚が体じゅうにお経を書き、耳にそのお経を書き忘れ、芳一の耳が切られてしまうという痛みなどが、伝わって来るようでした。その場面や、侍の声のおそろしさなどが、細かく書かれているので、より怖さを感じました。とても怖いけど、どんどん話の中に引きこまれて行くところがおもしろいです。読みやすいし、表現もはっきりとしているし、二回読んでも、また、お話の中に入っ
て行ってしまうので、下級生でも、読んだことがくり返しある人でも、楽しめそうです。

最後のページに、〃小泉八雲のこと〃というページがあるのを見つめました。今まで、図書館の先生や、担任の先生に、小泉八雲は、島根県松江市に住んでいたということは聞いていて、知ってい

たと思うのに、その説明文にも、物語のように入って行っていました。小泉八雲。本名はラフカディオ・ハーン。父はイギリス人の軍医。母はギリシャ人と、「日本には全然関係が無い」と、その時思いました。が、ハーンがニューオリンズの新聞社に勤めていたときのこと、その市の百年祭を記念する博覧会で、日本の展示物を目にし、日本に興味を持つようになったようです。そんな時、ある雑誌社から「日本旅行記」のプランを持ちかけられ、こうして、ハーンは、日本にやって来たと分かりました。そして、松江に住むことを決心したのは、松江市の中学校で外国人の英語の先生を探していること知り、あこがれの神話の国、松江に住むことを決心したようです。

ハーンは、日本の古い伝説や奇談に関心を持ち、それらの話をまとめ、本にしました。その中の一つが怪談です。小泉八雲として、「耳なし芳一」「ろくろ首」など、他にもたくさん作品を生み出しています。

私は、物語を書くのが好きです。それは、小泉八雲のような方や、たくさん作家さんがいて、たくさん物語を読み、文や本などに親しみをもち、「文は楽しい。文が好きだ。」という思いが物語を読んで強くなったからだと思います。

私が住むこの松江市で、たくさん作品が生み出されていることに誇りを持ち、これからも、読書、文、本に親しむことを大切にしていきたいと思います。

中学生の部

〈優秀賞〉

「草ひばり」を読んで

熊本大学教育学部附属中学校一年 佐藤 恵梨奈

異国で生まれ、日本にやって来たラフカディオ・ハーンは、小さな虫、草ひばりの美しい鳴き声を愛し、その鳴き声に昔からの思いを聞いている。その小さなものあずかり知らない有機的なつながりをもつ同胞の歌を聞いている。しかも、人の世の恋人達もこれと似たことをしているという。いつまでも来てくれもしない花嫁を求めていると知っている。

私は、日頃虫の声を注意して聞くことなどなかったように思う。夏は窓を締め切り、クーラーをつけた部屋にいます。冬も同じように暖房をつけた部屋にいますので、そもそも虫の声自体を聞く機会もありません。ヘルン先生のこの作品を読んで、私は何気なく聞いたことのある、きつと鈴虫のものであろう鳴き声を思い出した。今思うとその鳴き声がどこか物悲しかった事に気づく。ヘルン先生は、その理由を教えてくださいました。私は過去からの声を聞いていたのだ。美しさとしは表裏一体であると思う。そして虫も私達自身も過去から連なる生命の連続に位置する存在なのだと気づかされる。だから

か、悲しいと同時にほのかなあたたかみも感じる。生活をしていく中で自然を少しずつ遠ざけてきた「今」に生きる私にとってこの作品は大きな発見を与えてくれた。

しかし、なぜ、異国から来たヘルン先生は日本で草ひばりという小さなものの声にひかれ、そこに遠い昔のメッセージを聞いたのだろうか。ヘルン先生はギリシャで生まれ、小さいころ両親が離婚し、親戚に育てられた経験を持つという。その後、いろいろな国を経て日本に来了。おそらく小さいころから寂しい時期を長くもち、自分自身と向き合い、繊細で鋭い感覚が養われていったことが想像できる。また、やっと日本で腰を落ち着け、日本人女性と結婚した。多くの人が経験する人生コースとは、大きく異なる人生を歩んでいる。辺境を経てきたヘルン先生だからこそ、小さなものの鳴き声に熱心な情熱をそそぎ、その声の本質を聞くことができたのだろう。悲しみを背負った人だったのかもしれない。

飼っていた草ひばりは交代した女中の不手際でえさが与えられず、自分の脚をかじり、死んでしまう。そのことにヘルン先生は信じられないほど苦しむ。たかが一匹の虫が死んだことで、善良な娘をしっかりとける。いかに虫の声に入れ込んでいたかがわかるが、やはり「今」に住む私は驚いてしまう。すなわちヘルン先生は虫の微小な魂と自分自身の内なる微小な魂との永遠の一体感を味わっていた。彼は、神の恩寵にすぎるかのよう、と書いている。うつとりと聞きほれていたのだろうか。私も、いまなら虫の声に生命全体の広

がりを感ずることができるようになる。私にとってそれは、とてもうれしいことである。

ふと、私は以前読んだことのある、夏目漱石が書いた「文鳥」という作品を思い出した。そして、今回、その短い作品を再び読んでみた。主人によって、しだいに愛情を持つて文鳥は飼われるが、その中でも主人と家人の世話の不行き届きで、文鳥は死んでしまう。そして、主人は下女をしっかりとつける。作品で文鳥は淡雪の精と表現されており、主人は、その文鳥が死んだことに腹をたて、小さな美しいものをなくした喪失感を感じている。ストーリーの共通性を感じ、面白かった。二人が小さいころ不幸な境遇を経験したこと、熊本で英語教師をしていたことなども共通している。しかし、同じような作品ではあるが、ヘルン先生の作品は文鳥よりさらに小さい草ひばりである。さらに、単に虫の美しい鳴き声を聞いているだけではなく、過去からの生命全体を感じ取っている。共通する部分はあるが、より深い精神性、霊的なものを、この「草ひばり」という作品から、感ずることができる。読んだ後の私の実生活にも変化をもたらしてくれていると思う。おそらく、もう私は必死に鳴く虫の美しい声を無心で聞くことはできないと思う。それらをふまえ、「草ひばり」を読んだことは、めったに出会えない貴重な読書体験であったとあらためて思う。

〈優良賞〉

「幽霊滝の伝説」を読んで

学習院女子中等科（東京都）二年 吉 田 真里亜

私は、夏になると怪談の本を読みたくなる。その中でも小泉八雲の怪奇短編集は、怖くて好きな本なので今年も読み返してみた。たくさん話の中で印象に残った一つが「骨董」の中の「幽霊滝の伝説」だ。読んだ後、NHKの番組が「幽霊滝の伝説」について取り上げ、その舞台となった鳥取県にある滝山神社の脇にある龍王滝を紹介しているのを実際に見て、この話が益々怖くなり感想を書いてみようと思った。

この話の内容は、ある冬の晩、黒坂村の麻とり場で働いている女たちが、怪談話をして盛り上がっていた。するとその中の一人が、恐ろしい所なので決して夜に近づいてはいけないという言い伝えがある幽霊滝に、これから一人で行き賽銭箱をとってきた者には、私が今日とった麻を全てやると言い出した。そうすると、他の女達も自分も麻をやると言い出した。するとお勝という女が、自分が幽霊滝に行き賽銭箱を取ってくると言った。そしてお勝はひとつぶだねの赤ん坊を背中に背負い飛び出して行った。その晩はとても寒く、空はよく晴れていて星明りはあつたがそれでも暗い中、滝までの長い道のりを、お勝は皆の麻をもらうためにどんどん歩いて行った。

その時にお勝が通ったと思われる道をNHKの番組で紹介していたのだが、細く草がたくさん生えている道から薄暗い参道を登っていかなくてはならず、とても長い道のりだった。今、私が同じようにこの道を夜通れと言われても、絶対に断るだろう。電灯も何もない本当に暗く怖く長い道を通ってまでも幽霊滝に行ったお勝の気持ちは、麻が欲しいという欲や、やり遂げて皆を驚かせたいという思いで一杯で、その怖さを跳ね返すほどだったのだろう。しかし、そんな恐ろしいと言われる道を通るのに、なぜ一人しかいない大切な子供を連れて行ったのだろう。多分万が一何かあったら大変だから、子供は置いて自分だけ行こうという冷静な判断も出来ないほど、お勝の心は賽銭箱をとりに行くのだというやる気持ちで一杯だったのではないか。私はお勝をみると夜道の怖さより人の欲や恐れを知らない心の方が何だか恐ろしく感じた。

そして、やっと轟然と落ちる滝にたどり着き、氏神さまの祠にある賽銭箱を水明かりの中見つけて手を伸ばした時に、二度滝の中から「おいお勝さん」と、警告のように怒気を含んだ声が聞こえてきた。お勝は恐ろしさに立ちすくんだが、その声を無視して賽銭箱をつかみ駆け出し、村に戻った。そして、お勝の無事を皆が驚き賞賛して迎え、背中に抱いていた子供を下した時、その赤ん坊の首はもぎ取られていた。

私は、小さい頃から神社にもお寺にもお参りに行くし、その時は必ず札をして手を合わせる。昔も今も神様仏様は人間には及ばない

力があり、人は恐れ敬っているのだと思う。それなのに、お勝は「おいお勝さん」という声が二度も聞こえたのに、恐れず賽銭箱を取ってしまった。この声は、お勝に対してそんなことをしてはいけないという神様の警告だったのだろう。せっかく論してくれたのにその声を恐れず、そのまま賽銭箱を取って帰ったお勝はなんて愚かなのだろう。だから、お勝の一番大切な一人しかいない子供の命を取られるという罰が当たったのだ。お勝もまさか自分の子供が死ぬとは思っていなかったのだろうが、警告を恐れず賽銭箱を取ったお勝にとって、神様は一番つらい罰を下したのだ。やはりやってはいけない事は決して欲やノリで行ってはいけないのだ。私は改めてそう思った。

この話を読んで、神様でなくても例えば自分の親が注意をしてくれた時、私はちゃんと聞いているだろうか、大丈夫だとお勝のように耳を傾けない時があるのではないかと、自分を振り返り反省した。そして神様の怖い声が聞こえないように、これからも悪いことをせず、真面目に生きていこうと思う。

高校生の部

〈優秀賞〉

ものの捉え方

学習院女子高等科（東京都）二年 杉田 由愛

小泉八雲といえば、まず「耳なし芳一」が思い浮かぶ。有名な昔話として語られることも多いため、知っている人も多いだろう。私をはじめこの話を耳にしたときは、頭から離れることができなくなり、夜がとても怖く、暗く感じられた。

そのようなこともあり、私の小泉八雲へのイメージは、「怪談」が強かったわけだが、今回私が読んだ「日本の面影」という本ではそのイメージとは大きく違っていて、とても驚いた。

この本は、ギリシャ生まれの小泉八雲、パトリック・ラフカディオ・ハーンが、明治時代に来日した際に、西洋人である小泉八雲の目を通して見た日本の美しさを、紀行文として西洋にむけて紹介したものである。今までの私の小泉八雲のイメージとはうって変わりが、この本では、小泉八雲の日本への愛情の深さを強く感じとることができた。西洋人であるゆえ、斬新な着眼点で、日本の「もの」をとらえていたように思われる。小泉八雲の日本への強い感動が、文面を通して読み手である私に伝わり、強く感動した。

同時に、私はこの本から明治時代初期の日本についても、いくつか驚いた点がある。明治初期であった当時は、まだ西洋化もあまり進んでおらず、江戸時代の風習が色濃く残っていたようだった。今も残っている文化はあるけれど、百年で時代も大きく変わったことが感じとれた。これらの驚きは、小泉八雲の優れた観察眼と表現力によって強く当時の日本を感じとることができたからこそ、うまれたといえる。当時の日本をこの目でみているかのような高揚感も生まれ、自分の国のことながら、すべてのものが新鮮に思えたのである。

このように、日本の面影を読むことで、私はとても心動かされたが、特に「盆踊り」の中の文章が強く胸に残っている。

ある素朴な村娘たちの合唱によって私の胸に湧きおこった、あの感情は、いったい何だったのだろうか。あの絶妙な間合いと、断続的に歌われた盆踊りの唄のしらべを思い出すことは難しい。これは鳥のながれるようなさえずりを記憶の中に留めておけないのとおなじである。しかし、その何ともいえない魅力はいつまでも私の心から消えさらないのである。

この文章からも、小泉八雲のすぐれた表現力、観察力をうかがうことができるのはもちろんのこと、私は自身が幼い頃に体験した盆踊りを思いうかべた。少しの違いはあれど、私も同じような気持ちになった。まるで明治初期の盆踊り、小泉八雲と同じ空間を過ごしているようであった。小泉八雲によって表現された盆踊り、人々の

舞う姿はまるで一編の映画のような幻想的な世界であった。

盆踊りの章に限らず、全章にわたって小泉八雲の色彩表現の言葉の美しさと、情緒あふれる音の臨場感が感じとれる。小泉八雲はただみることのできる風景・文化だけでなく、みることのできない、その場の空気や音をも文字におこすことで読み手に強い感動を与えていると私は思った。また小泉八雲は、ただ日本の文化や、都市部をしるしているのではなく、山間部など日本の「日常」が息づくところもまわり、文字にしている。このことから小泉八雲の探究心は、「本来の日本の姿」というところにあつたと思う。だからこそ、私たち読み手は、どんな歴史書を読むよりも素直に、日本を感じることができたのである。

私はこの本を読み終えた。しかし、「読み終えた」という事実にとどまるだけでなく、この本を読んだことによって、小泉八雲のように、自分でみたもの、感じたものを文字にしようと思った。西洋人の立場である小泉八雲のように、新鮮なものの見方をするのはなかなか難しいが、ただみた・感じた・行つたに終わらず、その時自分がどう思ったか、それは初めて思ったことなのか、はたまたそうでないか……。小泉八雲のように百年の時をこえ、たくさんの人に手にとってもらえる文章、まではいかなくとも、未来の自分が読み返したとき、少しでも豊かになったり、気持ち晴れやかになったりする、そのような文章を書きつづけようと決意した。

〈優良賞〉

「葬られたる秘密」 お園に共感

山口県立山口高等学校通信制二年 三 笠 晴 香

私は小泉八雲先生の名前や作品名を聞いたことはあるが、先生の本を手にとったことは今まで一度もなかった。しかし、このたび父親の勧めで、先生の作品を手にとることとなり、その中の「葬られたる秘密」が目にとまった。というのもこのタイトルにある「秘密」という言葉に興味を持ったからだ。誰にでもいろんな秘密があると思うが、さらに「葬られたる」という言葉を冠していて、葬られるほどの秘密とは何なのか、ますます興味がわいたのだ。

丹波の国に住む金持ちの商人である稻村屋源助の娘・お園は、一族の知人である「ながらや」という商人のもとへ嫁入りする。二人の間に一人の男の子が生まれるが、四年後お園は病死してしまう。しかし、お園の葬式を行つた日から毎晩、お園の部屋だった二階の筆笥のそばに、幽霊となつたお園が現れるようになる。幽霊となつたお園が成仏しない理由は一体何なのか。死人は自分の執着していた物が檀寺にやられずにいると、幽霊として出てくると言われている。そこで、親戚一同はお園を安心させるために思いつくままの品をお寺に納め、成仏できるよう努めた。しかし、幽霊のお園は毎晩同じ場所に現れたのである。毎晩現れるお園に、家族は相当悩ま

れたであろう。きつとお園は、気にかかる「秘密」を現世に残して死んでしまったことが心残りで、毎晩同じ場所に現れるのではないかと私は考えた。そしてその秘密は、二階の部屋の筆筒に存在すると思われた。しかし筆筒の中はすでに空っぽ。筆筒に対して何か成仏できない理由があるのかと、まるで探偵のような気分で、作品を読み進めながら楽しむことができた。毎晩幽霊が出ることに怖さを感じつつも、先にある秘密を早く知りたいとドキドキ感を感じられて、とても惹きつけられた。

とうとう源助の母は、檀寺の住職である大玄和尚にこのことを相談する。和尚はその筆筒の内か、またはその近くに、何か女の気にかかるものがあるに相違いないと考え、日没後、その部屋へ向かった。幽霊のお園が現れた後、和尚は部屋をいろいろと探り、とうとうお園が気にかけていたものを見つけた。それはなんと、「京都で修行していた時にもらった艶書」つまり「恋文」だったのである。

「これが幽霊のお園が成仏できなかった理由か！」と、モヤモヤしていたものがすっきりと晴れた。しかし、何故恋文が成仏できない理由なのか。私は、同じ女としてその気持ちを考えたところ、いつか誰かに見つかって読まれるのが恥ずかしいという気持ちがあつたからではないかと推測した。そう思うと、幽霊のお園に抱いていた恐怖はなくなり、むしろ愛らしさを感じた。確かに、他人に自分宛てのラブレターを見られるのは恥ずかしいと共感した。では、何故その恋文を生きている時に捨てなかつたのか。これもまた同じ女

として考えてみた。恋文とは、好意を形に示したものであると私はみなしている。好意をもたれるということは、お園に女としての魅力があつたからではないだろうか。その事実が形として存在する恋文を捨てることは難しいだろう。私がお園の立場だったら、きつとお園と同じ行動をとると思う。

和尚が艶書を誰にも見せることなく焼き捨てる幽霊のお園に約束した後、お園は微笑して消えていった。その後、和尚も約束通り艶書を焼き捨て、秘密を葬った。きつとお園は安心してこの世を去れただろう。私は、お園が無事成仏でき、家族も安心して家で過ごせるだろうと、私事のように安堵した。そして、その恋文が旦那さんに見つかる前でよかった、と胸をなでおろした。

お園の秘密が分かるまでは多少恐怖に震えながらも推理を楽しむ自分がいたが、お園の秘密が分かっただけからはずつとお園に共感していた。前半は恐怖を感じつつも家族の立場の気持ちを考えたり、探偵のような気持ちになっていたが、後半は女としてお園の気持ちに寄り添うようになり、むしろ愛情のようなものまで感じていたように思う。

私は昨年、脚に腫瘍が見つかり、緊急入院することになった。そのため卒業が一年遅れてしまい、かなり落ち込んでいたが、この作品に出逢ったことで、いつのまにかお園から少し元気をもらったような気がする。小泉八雲先生の作品はまだ読み始めたばかりだ。これから先生の作品を意欲的に読んでいきたいと思う。

一般の部

〈優秀賞〉

小泉八雲にとっての「松江」

埼玉県川越市 成 本 孝 宏

誰にだって特別な場所というものがあるだろう。離れていても忘れられず、足を運べば他の場所では決して味わえない感慨に浸らせてくれる地……。多くの人々にとっては、故郷が当てはまるのではなからうか。

しかし、事情により故郷との絆が希薄な人もいる。その具体例として、小泉八雲が挙げられよう。何しろ彼はギリシャ出身でありながら、十代での渡米を機にヨーロッパを離れた後は母国に帰還しなかったのだから。

それでは、八雲にとっての特別な地はどこなのか。日本人の配偶者を得て、日本に帰化し、日本で没した以上、日本にあると考えるのが妥当だろう。その中でも、来日当初に居を構え、当時の体験に関連する著作を多数残している松江は有力な候補になると考えられる。そこで、八雲にとっての「松江」について、「英語教師の日記から」と「出雲再訪」の二編を参考に考えてみたい。

まず「英語教師の日記から」では、八雲が尋常中学校と師範学校

に勤務した期間の松江での生活の様子が綴られている。親切な同僚の西田や珍奇な品々を自宅に持ち寄って楽しませてくれる生徒ら、八雲はとりわけ尋常中学校での人間関係に恵まれた。また、毎日接する日本文化や日本人の国民性に深い感銘を受けた。周囲の人々との心温まる交流や日本に関する称賛の記述が続くため、いかに八雲が松江で幸福な時間を過ごしたかが、よく伝わってくる。

なお、「日記」と銘打たれてはいるものの、後年の編集が加えられ、事実と反する記述も見られる。八雲が熊本に転任した後の出来事である教え子・横木の夭折が代表例だろう。作中ではその白装束の亡骸に八雲が対面を果たしたことになる。作中ではその白装束という劇的な場面の描写で締め括られている。要するに純然たるノンフィクションではないのだが、八雲が施した演出は、却って当時の日々への思い入れの強さを物語っていると言えるのではないか。

熊本への赴任に伴い松江を離れた八雲が、数年ぶりに松江に再訪した際の模様をまとめたのが「出雲再訪」である。久し振りに松江を訪れた八雲は、かつて暮らしていた頃のような高揚感を覚えることはできなかった。

果たして、こうした心境の変化の背景にあるものは何であろう。結局のところ、松江は八雲にとって特別な地ではなかったというところか。いや、そうではない。私がそう主張する根拠として取り上げたいのが、「出雲再訪」の冒頭部だ。蒸気船で松江に向かう最中、八雲の胸中を占めていたものは期待ではなかった。長らく離れてい

た松江にどのような印象を受けるのかと、不安を覚えていたのである。何故か。

松江を離れた後、大阪、京都、神戸などを訪れたことで、八雲は来日当初に抱いた「お伽の国」としての日本、更には妖精のような第一印象を受けた日本人に対する幻想を打ち砕かれていた。それらの都会で彼が目当たりにしたものは、西洋文明の色濃い影響の下で無残にも廃れていく日本の文化と民族性だったのだ。出雲で暮らしていた頃、日本全土が出雲のような所だと思い込んでいた八雲が、失望を禁じ得なかったことは想像に難くない。それだけに、松江にも西洋文明の影が忍び寄っていて、かつてのような桃源郷ではなくなっていたとしたら……。一縷の望みに縋ろうとしている間に到着を心待ちにする気分になど到底なれなかったのも当然だろう。

しかし、八雲の心配は杞憂に終わった。白い大橋の色を除けば、松江には何ら変化は認められなかった。他の地方とは全く異なる独自性を帯びた松江の文物は八雲の目に新鮮かつ面白いものに映ったし、至る所に以前と変わらぬ光と彩りが輝いていた。松江の空気を吸って安堵感で緩む八雲の表情が、私の脳裏に浮かんでくるようだった。

やはり、八雲にとって「松江」は唯一無二の土地だったのだ。それなのに憂鬱を払拭できなかったのは、滞在が束の間の夢のような儚いものと承知していたからだろう。東京への赴任を目前に控える中で、率直に吐露している不安が何よりの証拠である。

八雲は日本に対する幻滅を抱えたまま息を引き取ったと聞く。もしも彼が晩年を松江で過ごせていれば、その最期はもつと心穏やかなものになっていたのでは……。しかし、自らの運命に同情を寄せられることは、八雲の本望ではないのかも知れない。それよりも彼が望むものは、心から愛した日本文化の保護・伝承に我々が努めることではなからうか。それこそが八雲への精一杯の供養になると信じ、使命感を持って取り組んで行きたい。

〈優良賞〉

「雪女」考 その二

美しい顔

埼玉県越谷市 森 とし子

小泉八雲Ⅱラフカディオ・ハーンは、美しい顔に一方ならぬ執着を持ち続けた人だ。シンシナティ時代、店先で見た商品パッケージの女性の顔に息も止まるほどの衝撃を受け、顔写真の主を突き止めるようとした。大きな黒い目、剣のような鼻、美しく締まった口。後にインドの王族の血を引く女だと判明する。

このことは、彼が幼くして生き別れたギリシャ人の母の面影を狂おしいまでに求めていたことを物語っている。彼は、幼児の悪戯心から母の顔を平手で叩いた時の思い出の顔を、後生大事に心に抱き

続けた。「黒くてデリケートな顔」「大きな黒い眼」。母の写真を一枚も持っていなかったハーンは、弟ジェームズへの手紙で、「どんな大金よりも私はお母さんの写真が欲しい」と言っている。彼の中で褐色の肌に大きな黒い瞳の母の面影は、年月と共にこのうえなく美しい顔となつていったに違いない。

ところで、ハーン最晩年の傑作「雪女」だが、巳之吉が心を打たれた白い女の美しさも、妻お雪の美しさも、厳密には「顔の美しさ」を表しているのである。渡し守の小屋に雪女が現れて、巳之吉と対峙する場面。茂作に白い息を吹きかけていた女が巳之吉の方へ向き直り、彼の上に身をかがめてくる。低く、さらに低く、顔が触れるばかりに。その時巳之吉は、女がとても美しいと思った。

目の前に迫ってくるのは雪女の顔であつて、姿全体ではない。巳之吉は、雪女の顔の美しさに感動した。感動は恐怖よりも強かった。縫い物をしている妻お雪に見とれた巳之吉が、思わず雪女に会ったことを話してしまうのも美しい顔に感動したことによる。原文にはこうある。

“To see you sewing there, with the light on your face, makes me think of a strange thing that happened when I was a lad of eighteen. —— (譯) ——”

行灯の光に映えるお雪の美しい顔も、雪女の恐ろしくも美しい顔も、共にハーンの心の中の母の面影なのである。では、褐色の美し

さが雪のように白い美しさに変わったのは何故なのか。雪女は何を象徴するのだろうか。

牧野陽子氏によれば、「鳥妻」「泉の乙女」から、妖精妻の描写に「月のように色の白い」という形容が現れるのだという。ボードレールの詩「月の贈り物」に影響を受けたのではないかという。その後ハーンが月よりも更に白い雪の美しさに目覚めるのは、来日して松江で雪の体験をしてからだと思ふ。

一八九一年一月、ハーンは松江からチェンバレンへの手紙で、吹雪と降り積もった雪の猛烈さ、風邪を引いて寝込んだことを伝えている。この時感じたのは専ら雪の忌まわしさだったが、その後熊本からの手紙には「今はもう雪の美しさがわかる」と書いている。注目すべきは、雪女という妖怪の存在を初めて知ったのが松江だということである。「知られぬ日本の面影」の中の「幽霊と化け物」に金十郎が語る雪女が描かれているが、「真つ白け」の「さ・む・し・い・顔」で、美しいわけではない。それがこのうえなく美しい顔の雪女として作品化していくのには、長い年月とハーンの心の変容があつた。

一九〇〇年に出版された「明暗」に所収の「夜光虫」には、文筆をもつて芸術に奉仕するのだというハーンの自覚と誇りが読める。夜光虫の光り輝く夜の海で、彼は「白は最高の色」「お前の役目はそれらの灯をとす一助となること」という「声」を聞く。この天啓を得て、彼の心の中で最高に美しい母の顔は褐色から白に変わる。そして、松江での鮮烈な雪の体験は、美しさと過酷さを併せ

持つ雪の象徴であり、この世で最も美しい面影の人、母を表す「雪女」を生んだのではないだろうか。

更に、芸術に奉仕する者としての彼の誇りは、美を感じる心は何物にも勝って強く尊いという主題を「雪女」の物語に込めた。雪女は、美しさに感動する巳之吉を殺すことが出来ずに去っていく。去りゆく雪女は、ハーンを置いて去ってしまった母であり、残された巳之吉はハーンである。幼子を置いて去らなければならなかった母の苦しみと悲しみを描き、残された自分の途方に暮れる姿を描いた。こう書くことによってハーンは、母を失った悲しみも母恋しの心も乗り越えて、己の芸術を全うする心を定めていったのである。

最期に、「雪女」はハーンの数少ない創作作品だと私は思っている。ハーンの再話作品には必ず原作があり「怪談」の序文で彼自身もそう述べている。しかし「雪女」は、西多摩郡調布の一百姓が自分が生まれた村の伝説として語ってくれたもので、記録されたものの存在は知らないと言っている。百姓の話はごく簡単なもので、それを基にハーンが創作したのではないか。鈴木牧之の「北越雪譜」にも、その他各地の民話にも、ハーンの「雪女」のような話は無いという。それで、私はますます創作説を信じているのである。

詩

〈優秀賞〉

雪女

岐阜県加茂郡八百津町 新井 悠

男女あわせて十人の
子ども授かりうれしかり。

巳之吉お雪の夫婦には

「幸福」二文字がよく似合う。

末代までの幸せを

巳之吉誓った妻子前。

なのに去ったはお雪方（おゆきがた）

正体ばれて仕方なく

巳之吉と子等を捨てて去る

泣く泣く去れば良いものを

脅し言葉を言い残し

巳之吉振り切り雪の中。

十人の子等と残されて

困った困った巳之吉は

父母も嫁までいない日を

いかに過ごすか見当つかぬ

まずは子らへの説明を
頭をひねり考える。

泣き喚く子に憤慨する子

母を慕いて飛び出す子

腹が減ったと泣き出す子

十人十色の子の世話なれば

巳之吉苦勞いかばかりか

想像するに忍びない

夜泣きもすればおねしよする

かといって仕事は手伝えぬ

子等と泣きべそ巳之吉は

お雪の去ったを悔やむ日々

されど戻らぬお雪なり

今日も夜更けが来る恐さ。

〈優良賞〉

のっぺらぼう

千葉県市川市 森 下 万 尋

合理では説明のつかないことも
理性の鋭いメスに切り裂かれることなく
まだやわらかな心が脈うち
だれの眼の奥にも
自然への畏敬の念がともっており
幽霊もお化けも架空のものとはいえ
わたしたちの五感はゆったりと
闇のなかに溶け込んでいた
欧化を急ぐ都から遠く離れた松江
ここを訪れたヘルンの右目には
古き日本の万象が新鮮に視え
失明の左目は
闇にすむものたちを捉えている
もの豊かとはいえない時代
それでものっぺらぼうもむじなも
ヘルンの傍らで息を吹き返してくる
灯り一つない寂しい闇が
かつての紀の国坂をおおい
その闇にむじなやお化けが抱かれ

火影にひょこりと現れもすれば
星明かりの薄い夜などには
枯れ尾花が幽霊に見え
のっぺらぼうにさえ出番があつた

それに比べて眩しい光に溢れながらも
のっぺらぼうも視えない現代とは
どこか寂しい時代に思えはしないか
顔に目や鼻 口がなかったら
区別のつかない羊のようで

もつとも一瞬の変化で
匿名の顔や覆面をした人間になる
わたしたちのふだんの顔も
個性と呼ばれる幻影を払えば
明るい闇に浮かぶのっぺらぼうではないのか
オフィスの窓やガラス戸に映る顔も
撫でればつるとむけて

*ヘルンⅡラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

講 評

《感想文》

◇小学生の部

今回の応募数は九点である。前回より応募数は減ったが、八雲の作品を読む楽しさに浸ったり、小泉八雲という「人」に興味や好感をもったりした小学生らしい率直な感想文ばかりだった。今後も学校図書館や地域の図書館などに八雲の作品がたくさん置かれ、その魅力を味わう子どもが増えて欲しいと願う。

優秀賞の「八雲の怪談のみ力とこわさ」は、八雲が創りだす怪談の魅力について自分なりの考えをもち、それがしっかりと書けている。また、数ある八雲の怪談のテーマを考えた深みのある感想文でもある。文章中の随所に光る表現も見られる。

優良賞の「耳なし芳一を読んで」は、八雲の作品などの優れた文学作品にふれたことで、文を書くことや読むことが好きになった、という筆者の率直な感性に好感もてる。作品の魅力からハーンの生き方にも興味をもち、それが地域愛にもつながっているところもこの感想文の良さである。

（講評者 柳野 祐子）

◇中学生の部

昨年とほぼ同数の応募があった。八雲作品と出会い、その面白さにふれ、八雲自身の生き方にも興味を持ったというものが多かった。しかし、誤字や表記上の誤りが見られるものもあり、推敲の必

要性を感じられた。

最優秀作品は、「草ひばり」に描かれた小さな虫の鳴き声から、太古から現在へと続く生命のつながりに思いを馳せている。また、他の作品との関連性や八雲自身の生き方についても考え、自分なりの思いを表したところに好感が持てる。

優良賞作品は「幽霊滝の伝説」に描かれた「お勝」の姿から、自分自身のこれまでの生活を振り返り、今後の生き方についての思いを表している。中学生らしい素直さが感じられる作品であった。

（講評者 永野 信吾）

◇高校生の部

昨年度と比べ大幅増の五編の応募があり、いずれもしっかり作品を読み、ていねいに書かれたものであった。全国各地からの応募があったことは嬉しいが、地元松江市からの応募がなかったのは残念である。

最優秀作品は「日本の面影」を読み、それまでもっていた「八雲Ⅱ怪談」といったイメージを打ち破る新たな世界を発見した喜びが書かれている。八雲の観察眼と表現力に刺激を受け、自らも表現していきたいという意欲が感じられた。

優良賞作品は「葬られたる秘密」の「お園」の生き方に自分自身を重ね、女性としての生き方について考えている。初めての八雲作品との出会いが、これからを生きるエネルギーになるということを伝える作品であった。

（講評者 永野 信吾）

◇一般の部

優秀賞の「小泉八雲にとつての『松江』」では、「英語教師の日記から」と「出雲再訪」の二編を取り上げている。「英語教師の日記から」では、とりわけ尋常中学校での人間関係に触れていて、「八雲が施した演出は、却って当時の日々への思い入れの強さを物語っていると言えるのではないか。」とまとめている。

「出雲再訪」は、講談社学術文庫に収められたものであるが、実は、これはアメリカの論文に収められたもので、三十年くらい前に発見されたものであり、出雲を再訪した八雲の不安が述べられているが、出雲の文化と人間に変わりはなかったという安どが述べられている。

八雲の感情の起伏が、うまく表現されていて、よく分析した作品である。

優良賞の「『雪女』考 その二——美しい顔——」は、八雲研究者の分析にも及び、よく研究されており、多角的によく読破されている。
(講評者 日野 雅之)

《詩》

今回は、昨年度よりも応募作品が減少したが、おもしろい作品の割合が高かったように思われる。

優秀賞「雪女」は、お雪が去った後の巳之吉を描くという発想が秀逸。十人の子どもを抱えて困り切る巳之吉。「夜泣きもすればおねしょする」子らと巳之吉は、とても大変そうだがどこかユーモラ

スで、原作の持つ不気味さをリアルな現実に接続するようでもある。優良賞「のっぺらぼう」は、八雲が捉えた「闇にすむものたち」が「視えない現代」の不気味さを丁寧に浮かび上がらせた。終わり方も印象的である。佳作の「土竜／ほうむられた秘密」は、女の秘密を知りたいがためにモグラになったという着想が面白い。八雲作品から派生した独自の世界がある。小学生の応募作から「ほう一となかまたち」を佳作とした。物語に引き込まれて、芳一に声援を送るドキドキ感が伝わってくる。リズムにのった楽しい作品である。

(講評者 升田 尚世・山根 繁樹)

【審査員】

谷 由美子	永野 信吾	日野 雅之
升田 尚世	柳野 祐子	山根 繁樹
山根 貴司	渡部 寛子	

(五十音順)

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)

1891(明治24)年 小泉家蔵

平成29年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

平成30年3月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
八 雲 会